

2022年1月30日（日）／説教者：國分美生

説教：「バラバラに、しかし共に」

聖書：創世記11：1～9

バベルの塔の物語は、真の意味で一つになるとはどういうことか、何をもってして私たちは一つになるといえるのか、そのような問いを投げかけます。

物語の舞台は世界最古の文明発祥の地として有名な古代メソポタミア…今でいえばイラクのあたり。人々はこのバベルの塔をつくるにあたり「石の代わりにレンガを、漆喰の代わりにアスファルトを」使いました。その材料と作り方は古代メソポタミアにおける神殿や城壁の作り方を反映しています。実際主要な都市にはこのような「ジックラトゥ」と呼ばれる高い塔が数多く建設されていました。その塔は王国の政治的・宗教的権力の象徴であり、王たちの誇りでした。4節に「天まで届く塔」、「有名になろう」とあるとおり、自らを神と並ぶものとし、力を見せつけるためのものでした。

古代メソポタミアの国々は専制国家でした。支配者たちは周辺の小さな力の弱い国々が、独自の道を歩むことを許さず、これら制圧して、支配体制に組み込みました、周辺の諸民族を一つの支配のもとに統制しました。「全地に散ることがないように」とはそのような帝国の支配の論理を映し出しています。イスラエルは大国のはざままで翻弄され続け、ついには祖国を失うに至った民です。その経験から、権力を持つ人間の驕り高ぶりは人間から見ていかに絶大に見えても、神の介入によって完全に覆されるであろうことを確信し、その神への信頼をこの物語に込めました。

神が人間の目論見に介入して人々を混乱させ、全地に散らされたことは神の厳しい裁きですが、一方で神の恵み・救いの行為であることはいまでもありません。神は人間の不遜で浅はかな暴走を阻止されます。神になり替わろうとすることは、自分と神との関係が破壊され、自分と他者の関係が破壊されることだからです。

これは私たちにとって残念な結末ではありません。たとえ違う言語を話す者同士であっても、心が通い合えば共に生きることにはできる。ばらばらに、離れて暮らしていても思いがつながっていれば、遠く離れて連帯して生きることが出来る。また、ばらばらであるからこそ、一人の人がその他大勢を統制して支配・管理することはできなくなる。軍国教育や同化教育を経験したり、学んで知っている私たちにとっては、一人一人の主義主張や個性が抑え込まれることなく、受け入れられている状態とはなんと素晴らしく、大事なことかと思わされます。(國分美生)